

## 有島武郎の西洋観と『迷路』

張 輝 劉笑非

**要 旨：**有島武郎は、西洋の文化を幅広く摂取し、近代日本の最も西洋的な作家と評されている。しかし、『迷路』から西洋を相対化する有島の姿勢は見れなくはない。比喻と象徴性を運用し、西洋文明の誘惑、白人文明の同化願望など、といった当時の日本社会の実相を表現したのが、まさしく、『迷路』である。だが、異国の恋愛体験の日常化、異なる階級や国の導入などの要素により、劣等的な位置ではなく、アメリカ人と交流できる主人公像が構築されうる。さらに、日本文明とアメリカ文明の融合を象徴的に表現する混血児、およびその混血児をめぐる劇的な展開からは、東西文明の混合や西洋文明の同化に対し、態度を保留する有島の姿勢が確認できる。本稿では、『迷路』の分析を通じ、従来の西洋文明を崇拜する有島像を揺るがせる試みをした。

**キーワード** 有島武郎、西洋、迷路、混血児

### The View upon the West Civilizations in Takeo Arishima's *Maze*

Zhang Hui Liu Xiaofei

**Abstract:** Takeo Arishima's works are deeply influenced by the West, and he is regarded as the most westernized writer in modern Japan. However, in the novel *Maze*, the opposite attitude between Arishima and Western culture is displayed. Although the works use a lot of metaphors and symbols to express the temptation from the West and the desire for white identity, at the same time, through the daily experience of foreign love and the introduction of different classes and nationalities, it weakens the image of the hero being discriminated against and constructs a Japanese image that can communicate with Americans. In addition, the image and destiny of the Chinese–Japanese–American hybrid, which symbolizes the fusion of Japanese civilization and American civilization, though it has always existed in lies and fantasies, it indicates that there is an attitude of reservation towards the mixture of eastern and western civilization and the assimilation of Western civilization. Therefore, the *Labyrinth* presents the multi–faceted and complex nature of Arishima's understanding of the West. This phenomenon has shaken his image of a single Western worship writer.

**Keywords:** Takeo Arishima; Western; *Maze*; half–breed

## はじめに

「誰がいい出したか知らないが、有島は『最も西歐的な知性の作家』で、漱石や鷗外、藤村などのように東洋への回帰、日本への回帰があまり見られない珍しい作家と言えるだろう」<sup>[1]</sup>小玉晃一「有島武郎と西洋—イブセンにも触れて—」（『有島武郎研究叢書第九集有島武郎と西洋』、東京、右文書院、1996年7月）、14～15頁。）と小玉晃一が述べているように、西洋文化に傾倒するという有島の作家像は、今日ほぼ定着している。さらに、栗田広美は、有島のアメリカ留学体験について、実証的な調査を行い、近代の欧米文明を相対化し、中世ヨーロッパの文明に転向する有島の動向を析出した。それは小玉の言葉を補完する一方、従来アメリカを崇拜する有島像を揺らがせた。

アメリカを舞台とする長編小説『迷路』は、「首途」（『白樺』一九一六・三）、「迷路」（『中央公論』一九一七・三）、「暁闇」（『新小説』一九一八・一）という三つの作品の総題である。その後、「首途」と「暁闇」を一つにまとめて、一九一八年六月に、「首途」と「迷路」の二部構成で編集され、新潮社から刊行されている。このうち、小説の序章なる「首途」は、有島のアメリカ留学中の日記をベースにしたものである。有島の渡米は、一九〇三年から一九〇五年までの期間である。アメリカ体験をその十年後に、『或る女』の後編と共に、小説の題材にしたということは、おそらくただアメリカにおける被差別体験を再現することのみにとどまるものではないだろう。また、『迷路』における「混

血児」の表象は、もっとも議論されている。なぜ主人公は混血の私生児にそれほど強い思いを抱くのか。本稿では、『迷路』の分析を通じ、有島の西洋観をさらに追究する。

## 一 Aの人物像

先行研究では、『迷路』をある日本人の挫折と読んでいる。たとえば、植栗彌は、主人公のAのアメリカにおける恋愛体験を「地獄遍歴的」なもの捉え、『迷路』における教養小説的な要素とその独自性を検討している<sup>[2]</sup>植栗彌「有島武郎『迷路』論—主人公の地獄遍歴的様相に注目して」（『上智大学国文学論集』、第22号、東京、上智大学、1989年1月14日）、129～151頁。）。確かに、「首途」で新しい自分への出発を決意し、小説の本編に入ると、道の開拓を求めながら、女性遍歴を重ねるAの姿は、『迷路』を一種の遍歴小説と読むことを可能とする。ただ、それらの体験が地獄的遍歴とは言えないだろう。確かに、Aは、人種が異なるという理由で、デュリヤに拒絶されたが、デュリヤの妹のフロラに深く愛されている。だが、Aは、フロラを「親切によく世話をしてくれた」人としか見ていない。ここで浮上するのは、ごく普通の恋愛の三角構図なのではないか。この小説の最大の特徴は、日本ではなく、アメリカを恋愛物語の舞台にしたことである。

デュリヤとP夫人の造形も、有島の作品を概観すれば、そこにおいて特に珍しいものとは言えない。例えば、「デュリヤは『寒い寒い』といひながら、ぴったりと彼れに寄添つて座をしめた。厚い膝掛けの

下からは、血ぶとりな彼女の体の曖昧が遠慮なく彼れに伝はつた」という場面や、フロラの片思いをAに伝える時に、デュリヤの顔に「悪戯らしい、蠱惑的な微笑」が浮かぶという描写からは、デュリヤが男性を惹きつける術を熟知する悪女的な人物であることがわかる。デュリヤ像は、『迷路』以前の作品には常に登場する悪女であり、男性を翻弄する『或る女』の葉子や『石にひしがれた雑草』のM子と共通している。AとP夫人の関係も、P夫人の肉体の誘惑から始まる。学生を誘惑するP夫人像は、『星座』の新井田の夫人の造形と重なる。

『迷路』の恋愛物語は、ありふれたともいえる三角関係と不倫関係についてのもので、さらに、日本を舞台とした有島の作品と比べても、女性の登場人物の造形も変わらない。つまり、有島が描こうとするのは、単なる日本人男性の挫折の物語ではない。むしろ、それはあからさまに作品の前提とされているのであり、この小説で書かれているのは、あらゆる人間関係におけるその非対称性なのではないだろうか。

Aの身体描写を見てみよう。「広い厚い肩を持つた中背の健康な体の上に正しく据ゑられた」Aの顔は、「体格に比べては少し小さく見えただけども、きりつと引き締まつてゐた。デリケートな輪郭ではなかつた」。のみならず、彼の「耳から顎にかけての骨つた堅い線は、肉情と物欲の激しさをさへ語つてゐた」。さらに、「物思ひにでも耽る時」、彼の顔は「非常に精神的になつて美しかつた」。すれちがった学生たちは、「あれもjapか知らん。いゝ顔をしてゐる」と彼の顔を褒めている。Aの身体

描写には、劣等者日本人とされうるような表現は一切見られない。

ここで作品における人種差別の存在を否定するわけではない。むしろ、栗田の指摘通り、「『迷路』はまず、『優者アメリカ』対『劣等者日本』という厳然たる位置関係がある」<sup>[3]</sup>栗田広美『亡命・有島武郎のアメリカ—〈どこでもない所〉への旅』（東京、右文書院、1998年4月）、20頁。）。ただ、「優者アメリカ」対「劣等者日本」という位置関係は、所与の前提としてこの作品に存在する。『迷路』は単にある日本人がアメリカ社会において差別され、そこから遠ざかる過程を呈示するのではない。Aはその体験者であるものの、その劣等性は隠蔽された。

## 二 有島の人種観と「混血児」の表象

この小説は、大正五（一九一六）年から大正七（一九一八）年にかけて完成されている。周知の通り、西洋文明は明治維新以後、大量に日本に導入されるが、大正期に至って、極端に西洋を崇拜する風潮が次第に落ち着くようになる。日本国内では西洋文明、西洋の体制に懐疑的な声が、保守派に限らず上がっている。『迷路』は、近代日本におけるアメリカに対する様々な態度を語っていると考えられる。たとえば、アメリカにいながらも、日本人の特性を固守するKと贅沢な西洋風の雰囲気漂っているMはその両極である。それに対して、主人公のAは体験者として、アメリカ社会における日本人の実態を語っている。胎児の存在は、日本とアメリカの関係のテーマを改めて提示する。「黒い硬い真直な髪の毛と、青い眼と、白と黄との漆喰をこね合は

したやうに光沢のない濁つた皮膚」という細かい描写から、胎児が内包する白人と黄色人種との結合が容易に読み取れる。アメリカと日本の結合を意味する混血児の未来を真剣に考えるAの行動からは、作者の姿勢も窺える。つまり、劣等に位置する日本が、アメリカに対し、如何に対応すべきなのかは、まさに有島が『迷路』を執筆する時点で考えた問題であろう。

このような「国籍・人種・階級を乗り越える」理想を作品の主題とする先行研究が多い。例えば、李甲淑は、「現代社会では、国境や人種、階級の差などを乗り越え、グローバルな地球社会へ向けて歩むことが要求されている。Aは時代を先取りし、次世代の我々の運命へのヴィジョンを提示していたのではないか」<sup>[4]</sup>李甲淑「有島武郎『迷路』論—Aにおける生活の意味について—」（『国学院大学大学院紀要（文学研究科）』第一二号、東京、国学院大学、1999・3、129頁。）と述べている。また、荒木優太は、「身体（黄色人種）と身体（白色人種）をとり結ぶ第三身体（混血）」を有島の「人種混合的な発想」とし、「血の混血過程を経て、差別被差別の固定化された血統的役割が消失していく」<sup>[5]</sup>荒木優太「有島武郎『迷路』における人種の問題」（『電子書籍プラットフォーム：パプー』（<http://p.booklog.jp/book/114490>）、株式会社 トウ・ディファクト、2017年5月1日））と論述している。さらに、混血児の存在は、P夫人の嘘であるにもかかわらず、有島の留学当時の書簡や修論「日本文明の発展」から見れば、その理想が潰えたと主張している。

この二つの論考は、おそらく、Aの人物像に過度に注目し、Aの理想を有島の理想と混同する解読であろう。たとえ留学当時、有島は、人種混合的な発想があったとしても、それは、あくまでも執筆時から十年前の見方なのではなかろうか。『迷路』が発表されたのは大正十七（一九一八）年のことである。そして、大正二十二（一九二二）年に、有島は評論「宣言一つ」を執筆している。その中に、「黒人種がいくら石鹸で洗い立てられても、黒人種たるを失わない」[[<sup>[6]</sup>有島武郎「宣言一つ」（『改造』、1921年1月）引用は、『有島武郎全集第九巻』（東京、筑摩書房、1981年4月）（9頁）による。]という有島の人種観が現れていると見られる一文がある。ここから窺えるのは、有島が人種問題を先行研究の見るように楽観的に考えていたわけではないということである。三年の間で有島の思想が激変したわけでもないだろう。

以下、小説の具体的な表現から、先行研究に対して反証を試みたい。まず、「白と黄との漆喰をこね合はしたやうに澤のない濁つた皮膚と、病的に痩せこけた体格とを持った哀れな混血児の私生児は育つて行く」などの表現は、これまで指摘された混血児の積極的な意味と全く異なる風景を呈示している。これはしばしばAのコンプレックスの発露として捉えられるが、ここに含意される嫌悪感や消極的な特徴は、いかようにしても、文明の発展、といった課題へと接続することはできない。しかも、そもそもこの小説において、混血児に関する積極的な記述は見られない。そのため、少なくとも『迷路』から、有島が人種の混合に期待

を抱いていることそれ自体を積極的に読みとるのは困難である。

そして、もう一つの問題点は、混血児が日本文明とアメリカ文明の融合とされる点である。それは、「国」という言葉が指向する絶対的な差にとらわれる読みに他ならない。ここで、純血な民族や純粋な国がそもそも存在しないと主張するのではない。というのも、当時の日本は、西洋文明を大量に吸収していた時期にあたり、決して純种的・純血的とは言えない。この意味で混血児とは、理想や未来ではなく、すでに存在し、他でもなく、当時の日本の実相なのではないか。しかも、小説において、当時の日本という混血児は、アメリカにとって、嘲笑・同情の対象にすぎない。「何しろ小ぼけなjap. は素晴らしい。呐喊する時に啞のやうに黙つたまゝで呐喊するさうぢやありませんか」「専制君主国は羨ましいと私がかねぐいふのはその事なんだ」「所が日本は立憲国ですよ」「何？立憲国？呪はれでもするがいゝ」「ハ、ハ、ハ」とあるように、車内の白人たちの会話はそのことを端的に表出している。また、Aが日本人であるを知って、彼らは、「心配せずに私の国に任せておきな。こゝにゐる人たちは皆んなお前に同情してゐるんだからな」と発言し、日本をアメリカの付属として見ている。これこそ、アメリカが創出する混血児の実相である。

### 三 矛盾体としてのA

Aの人物像について、先行研究では、「自由意志」という言葉が繰り返されて論じられている。例えば、坂田憲子は、「自由論によりながら」、「試行錯誤を重ね」「自己検証を追求する」[[<sup>[7]</sup>坂田

憲子「有島武郎『迷路』論」（『近代文学考（第一部門）』第五号、東京、近代文学考同人会、1977年11月）、14頁。）とAの方向性を指摘し、中村三春は、「物語全体が自由論と決定論の対立、並びに自由論内部の自由と責任との矛盾の解決に捧げられている」<sup>[8]</sup>中村三春「迷宮のミュートス『迷路』」（『新編言葉の意志—有島武郎と芸術史的転回—』、東京、ひつじ書房、2011年2月）、168—192頁）と作品全体の様相を論じている。ただ、作品の「自由意志」とは何か。それは、作品で書かれたキリスト教から自由になるという表面的な意味のみに留まっているのか。そもそも、Aが自由意志を語り始めるのは、神への信仰の離反からのものであるため、Aにとって、自由意志とは、キリスト教から離れ、自分の力で生きていくことに間違いない。ただ、本篇に入ると、Aのなかでアメリカへの不信感が生じており、Aの困惑の対象はアメリカ社会に移る。キリスト教を否定することとアメリカを批判することは一貫的なもので、つまり、前者は後者の契機にすぎないと考えられる。したがって、『迷路』における自由意志は、アメリカ社会への「信仰」から離脱する意味も含む。だが、アメリカ社会を出て、農場に逃げたAは自らとP夫人の子供の存在を知った後、またその混血児への執着はますます強くなったのも事実だ。つまり、Aがアメリカを否定しつつも完全にアメリカに未練があり、その承認願望が容易に消えない。というのが、Aとアメリカ社会の関係の現実である。

混血児はAとP夫人の不倫の結果であるため、AとPが対立する場面を見て

みよう。Pは、突然ピストルを取上げて彼につきつけ、Aと決闘する姿勢を見せた。不倫という言葉が示すのが、男女関係ではなく、男同士の関係であることは、この場面から容易に読み取れる。ピストルが象徴するのは、男同士の戦争であり、アメリカ白人と日本人の対決である。ただ、「二挺のピストルは二人の間の決闘を可能にしたろう。一つ足りないのは君の為に僥倖だ」というPの言葉は、決闘を終わらせる。「上等なアメリカ人対劣等な日本人」という位置関係を示し、日本人はアメリカ人と決闘する資格さえ持っていないことを暗喩する。また、Pの振る舞いが一種の自己中心的な行動にすぎないと、否定するAの姿勢がそこには読み取れる。そして、Aの中では、自分とP夫人との関係をPに「打ち出して見ると凡てはあまりに簡単であまりに平凡だった」とされる。つまり、白人の男性から資格がないと侮辱されていると知っていながらも、彼には羞恥などの感情は一切ないのである。それよりは、「彼れの心の中では悔恨と誇りが烈しく闘つてみた」。「悔恨」とは、言うまでもなく、Pを裏切ることの「悔恨」で、「誇り」とは、アメリカ人を虐げる快感にほかならない。また、AはP夫人に、「あなたの経験は僕が憐れむべき童貞の若者だといふ事を見ぬいてみたのだ」が、「僕の魂」は「あなたが要してはみなかつた—あなたが要してはみなかつたやうに」。そして、「それだのに僕はあなたを弄んだ」と強調している。要するに、アメリカ人の男性の妻との不倫を通じ、Aはかえって自らの位置を高めている。ここから見て取れるのは、アメ

リカとの交流が深まるAの姿なのではないか。また、P夫人との不倫は、まさしく、アメリカと日本の上下関係を攪乱する装置となる。最も重要なのは、不倫の結果、その混血児の父が日本人に変わることである。

#### 四 混血児の行方

物語はAの期待通りに進行するわけではない。P夫人はAへの未練を少しも見せず、「その肉塊に対して露呈の愛情の執着ももつてはゐないのだ」とされる。彼ほど「そんなくだらない出来事に対して」、「馬鹿らしい未練を持った人間」はいないとAは深く感じる。もし、P夫人との不倫関係も、劣等者日本人が男女関係を通じ、優等者アメリカ人と平等に交流しようとする手段と言うならば、混血児の不在は、その関係の不成立を暴露する仕掛けにほかならない。つまり、Aが混血児の父になれないことが象徴するのは、むしろ、自分が自分自身の主導権を握りかねることであろう。さらに、混血児の不在がP夫人の嘘である設定は、アメリカに誘惑され、混血児に執着する結果は、アメリカに翻弄される結果しか迎えられないことを意味すると考えられる。有島が描こうとしたのは、人種・階級を越える理想国ではなく、むしろ、主人公の不思議な執着を徹底して表現することで、実現不可能なことを目立たせるのではないか。結果としては、P夫人の妊娠と胎児の存在は嘘であり、混血児の誕生の可能性が打ち消されてしまっている。

「白色文明と黄色文明との同化を成功して白色人種をして黄色文明を同化させざるを得ざる様になさしむこと」[[<sup>9</sup>]有島武郎「日本文明の発展—神話時代から

徳川幕府の滅亡まで——」

引用は、『有島武郎全集第一巻』（小玉晃一訳、東京、筑摩書房、1977年8月、613～672頁）による。）が必要であるという有島の留学時代の家族宛ての書簡（一九〇四・二・二）からは、西洋文明に憧れる青年像が読み取れる。このように、Aの造形には、青年の有島の面影が見られる。有島がAに理想を幻滅させることは、まさに十年後の彼が、当時の自己を見直し、さらに相対化した帰結なのではないだろうか。

しかし、結末においても、アメリカからの誘惑はまだ終わらない。それは、P夫人でも、デュリヤでもなく、フロラである。Kは、臨終の際、「フロラもう一度来たよ。僕は……僕は君を……美しく……描いておいたぜ。あれはいゝ女だ」とAに述べる。そして、Aがフロラと交際するかどうか分からないまま、小説は幕を閉じる。フロラは、Aに一方向的に思いを寄せており、最初からAにとっての安全な逃げ場として描かれている。デュリヤに人種の理由で拒絶された時、P夫人に傷つけられた時、フロラの姿が、常にAの頭に浮上する。フロラは、何回も強調された、Aの人種的な劣等性を隠蔽する重要な設定である。前述のように、フロラの片思いがあるからこそ、Aのアメリカ体験は、挫折に満ちたものとは簡単には言えないものになっている。ただし、他方では、フロラのAに対する思いは、全て他者によって代弁される。作品では、フロラの告白や自分の思いを語るシーンが一切ないため、たとえAがフロラに戻っても、必ずしもいい結果を迎えるとは言い切れないだろう。

Aが面するのは、未知の世界にちがいない。ただ、Aが徹底的にアメリカ社会に排除されず、彼には選択肢があることが、結末の象徴性であろう。それは、Aの選択であり、混血児の日本の選択でもある。したがって、『迷路』は、西洋と日本の関係や、日本が面する現実を象徴的に語るテキストと認識すべきである。

### おわりに

人種差別の社会現実を内在化し、それを絶え間なく体験するAの旅は、当時の日本と西洋の関係を呈示するものにほかならない。比喩と象徴性を運用して、そのような関係を創出することにより、西洋文明からの誘惑、欧米社会への離反や対立、白人文明の同化願望など、といった当時の日本社会の実相を表現したのが、まさしく、『迷路』である。また、Aとアメリカ人の関係には、排除と差別が端的に表現されながらも、作品には異国の恋愛体験の日常化、異なる階級や国の導入など、無視できない要素が存在する。これらの要素によって、劣等的な位置ではなく、アメリカ人と交流できる主人公像が構築されうる。近代日本は西洋文明と日本文明の混血児として、いずれの道を選択するのかが決定されていないため、有島が日本回帰を主張していると断言はできない。だが、少なくとも、東西文明の混合や西洋文明の同化に対し、態度を保留する有島の姿勢が確認できる。『迷路』の後に書かれた作品『星座』は、従来指摘されたように、登場人物の多様な個性を尊重しつつ、統一を求める特徴を持つ<sup>[10]</sup>。つまり、融合・統一の前段階、個性の保持を強調すること

は、有島の動向として捉えられる。このように『迷路』を捉えれば、人種を超える理想について、より折衷的な見方が可能になる。すなわち、有島は、完全に同

化されることを批判しながら、文化の交差を否定するのではなく、むしろ、民族の個性を保ちつつ融合を求めることになるのだろう。

**注釈：**

- [1]小玉晃一「有島武郎と西洋—イプセンにも触れて—」（『有島武郎研究叢書第九集有島武郎と西洋』、東京、右文書院、1996年7月）、14～15頁。
- [2]植栗彌「有島武郎『迷路』論—主人公の地獄遍歴の様相に注目して—」（『上智大学国文学論集』、第22号、東京、上智大学、1989年1月14日）、129～151頁。
- [3]栗田広美『亡命・有島武郎のアメリカ—どこでもない所—への旅』（東京、右文書院、1998年4月）、20頁。
- [4]李甲淑「有島武郎『迷路』論—Aにおける生活の意味について—」（『国学院大学大学院紀要（文学研究科）』第12号、東京、国学院大学、1999年3月）、129頁。
- [5]荒木優太「有島武郎『迷路』における人種の問題」（『電子書籍プラットフォーム：パプー』（<http://p.booklog.jp/book/114490>）、株式会社 トゥ・ディファクト、2017年5月1日）。
- [6]有島武郎「宣言一つ」（『改造』、1921年1月）引用は、『有島武郎全集第九巻』（東京、筑摩書房、1981年4月）（9頁）による。
- [7]坂田憲子「有島武郎『迷路』論」（『近代文学考（第一部門）』第五号、東京、近代文学考同人会、1977年11月）、14頁。
- [8]中村三春「迷宮のミュートス『迷路』」（『新編言葉の意志—有島武郎と芸術史的転回—』、東京、ひつじ書房、2011年2月）、168～192頁。
- [9]有島武郎「日本文明の発展—神話時代から徳川幕府の滅亡まで—」引用は、『有島武郎全集第一巻』（小玉晃一訳、東京、筑摩書房、1977年8月、613～672頁）による。
- [10]例えば、安川定男は、『星座』は、「さまざまな性格の人間がさまざまな条件のもとにどういう風に育ち、どういう運命を辿っていくか多角的に「追求」する作品と評価している（「『星座』について」、『有島武郎論（増補版）』、東京、明治書院、1978年5月、293頁）。さらに、中村三春は、「細部の尊重と全体の調和との同時的実現を図る『全体化作用』」を、『星座』の形式的特徴の一つとして論述している。（前掲書注[8]、433頁）。

**参考文献：**

- (1)神田由美子・高橋龍夫編、『渡航する作家たち』、東京、翰林書房、2012年4月。

- (2) 『有島武郎事典』、有島武郎研究会編、東京、勉誠出版株式会社、2010年11月。
- (3) 外尾登志美「有島武郎『迷路』の論点について」『大阪教育大学紀要』第53巻、第一号、大阪、大阪教育大学、2004年9月。

注：本研究由“中央高校基本科研业务费专项资金（BLX201949）”资助。

（勤務先：北京林業大学）